

近年にない暑さである。どこを見ても、泥で固めた家々の屋根瓦が、鉛のやうに鈍く日の光を反射して、その下に懸けてある燕の巢さへ、この塩梅では中にゐる雛や卵を、そのまゝ蒸殺してしまふかと思はれる。まして、畑と云ふ畑は、麻でも黍でも、皆、土いきれにくつたりと頭をさげて、何一つ、青いなりに、萎れてゐないものはない。その畑の上に見える空も、この頃の温氣に中てられたせいとか、地上に近い大氣は、晴れながら、どんよりと濁つて、その所々に、霰を炮烙で煎つたやうな、形ばかりの雲の峰が、つぶつぶと浮かんでゐる。——「酒虫」の話は、この陽氣に、わざ／＼炎天の打麦場へ出てゐる、三人の男で始まるのである。

不思議な事に、その中の一人は、素裸で、仰向けに地面へ寝ころんでゐる。おまけに、どう云ふ訳だか、細引で、手も足もぐる／＼巻にされてゐる。が格別当人は、それを苦に病んでゐる容子もない。背の低い、血色の好い、どことなく鈍重と云ふ感じを起させる、豚のやうに肥つた男である。それから、手ごろな素焼の瓶が一つ、この男の枕もとに置いてあるが、これも中に何がはいつてゐるのだから、わからない。

もう一人は、黄色い法衣を着て、耳に小さな青銅の環をさげた、一見、象貌の奇古な沙門である。皮膚の色が並はづれて黒い上に、髪や鬚の縮れてゐる所を見ると、どうも葱嶺の西からでも来た人間らしい。これはさつきから根氣よく、朱柄の塵尾をふりふり、裸の男にたからうとする虻や蠅を追つてゐたが、流石に少しくたびれたと見えて、今では、例の素焼の瓶の側へ来て、七面鳥のやうな恰好をしながら、勿体らしくしゃがんでゐる。

あとの一人は、この二人からずつと離れて、打麦場の隅にある草房の軒下に立つてゐる。この男は、頤の先に、鼠の尻尾のやうな髻を、申訳だけに生やして、踵が隠れる程長い早布衫に、結目をだらしなく垂らした茶褐帯と云ふ拵である。白い鳥の羽で製つた団扇を、時々大事さうに使つて

ゐる容子では、多分、儒者か何かにちがひない。

この三人が三人とも、云ひ合せたやうに、口を嚙んでゐる。その上、碌に身動きさへもしない、何か、これから起らうとする事に、非常な興味でも持つてゐて、その為、皆、息をひそめてゐるのではないかと思はれる。日は正に、亭午であらう。犬も午睡をしてゐるせいか、吠える声一つ聞かない。打麦場を囲んでゐる麻や黍も、青い葉を日に光らせて、ひっそりかんと静まつてゐる。それから、その末に見える空も、一面に、熱くるしく、炎霧をたゞよはせて、雲の峰さへもこの早に、肩息をついてゐるのかと、疑はれる。見渡した所、息が通つてゐるらしいのは、この三人の男の外にない。さうして、その三人が又、関帝廟に安置してある、泥塑の像のやうに沈黙を守つてゐる。……

勿論、日本の話ではない。——支那の長山と云ふ所にある劉氏の打麦場で、或年の夏、起つた出来事である。

## 二

裸で、炎天に寝ころんでゐるのは、この打麦場の主人で、姓は劉、名は大成と云ふ、長山では、屈指の素封家の一人である。この男の道楽は、酒を飲む一方、朝から、殆ど、盃を離したと云ふ事がない。それも、「独酌する毎に輒、一甕を尽す」と云ふのだから、人並をはづれた酒量である。尤も前にも云つたやうに、「負郭の田三百畝、半は黍を種う」と云ふので、飲の為に家産が累はされるやうな惧は、万々ない。

それが、何故、裸で、炎天に寝ころんでゐるか云ふと、それには、かう云ふ因縁がある。——その日、劉が、同じ飲仲間の孫先生と一しよに（これが、白羽扇を持つてゐた儒者である。）風通しのいい、室で、竹婦人に靠れながら、棋局を闘はせてゐると、召使ひの丫鬟が来て、「唯今、宝幢寺とかにゐると云ふ、坊さんが御見えになりました、是非、御主人に御目にかゝりたいと申しますが、いかゞ致しませう。」と云ふ。「なに、宝幢寺？」かう云つて、劉は小さな眼を、まぶしさうに、しばたいたいが、やがて、暑さうに肥つた体を起しながら、「では、こゝへ御通し申せ。」と云ひつけ

た。それから、孫先生の顔をちよいと見て「大方あの坊主でせう。」とつけ加へた。

宝幢寺にある坊主と云ふのは、西域から来た蛮僧である。これが、医療も加へれば、房術も施すと云ふので、この界限では、評判が高い。たとへば、張三の黒内障が、忽、快方に向つたとか、李四の病關が、即座に平癒したとか、殆、奇蹟に近い噂が盛に行はれてゐるのである。——この噂は、二人とも聞いてゐた。その蛮僧が、今、何の用で、わざわざ、劉の所へ出むいて来たのであらう。勿論、劉の方から、迎へにやつた覚えなどは、全然ない。

序に云つて置くが、劉は、一体、来客を悦ぶやうな男ではない。が、他に一人、来客がある場合に、新来の客が来たとなると、大抵ならば、快く会つてやる。客の手前、客のあるのを自慢するでも云つたらよささうな小供らしい虚栄心を持つてゐるからである。それに、今日の蛮僧は、この頃、どこでも評判になつてゐる。決して、会つて恥しいやうな客ではない。——劉が会はうと云ひ出した動機は、大体こんな所にあつたのである。

「何の用でせう。」

「まづ、物貰ひですな。信施でもしてくれと云ふのでせう。」

こんな事を、二人で話してゐる内に、やがて、丫髻の案内で、はいつて来たのを見ると、背の高い、紫石稜のやうな眼をした、異形な沙門である。黄色い法衣を着て、その肩に、縮れた髪の毛の伸びたのを、うるささうに垂らしてゐる。それが、朱柄の塵尾を持つたま、のつそり室のまん中に立つた。挨拶もしなければ、口もきかない。

劉は、しばらく、ためらつてゐたが、その内に、それが何となく、不安になつて来たので「何か御用かな。」と訊いて見た。

すると、蛮僧が云つた。「あなたでせうな、酒が好きなのは。」

「とやう。」劉は、あまり問が唐突なので、曖昧な返事をしながら、救を求めやうに、孫先生の方を見た。孫先生は、すまして、独りで、盤面に石を下してゐる。まるで、取り合ふ容子はない。

「あなたは、珍しい病に罹つて御出になる。それを御存知ですか。」蛮僧は念を押すやうに、かう云つた。劉は、病と聞いたので、げげんな顔をして、竹婦人を撫でながら、

「病——ですか。」

「さうです。」

「いや、幼少の時から……」劉が何か云はうとすると、蛮僧はそれを遮つて、

「酒を飲まれても、酔ひますまいな。」

「……」劉は、ぢろぢろ、相手の顔を見ながら、口を噤んでしまった。

實際この男は、いくら酒を飲んでも、酔つた事がないのである。

「それが、病の証拠ですよ。」蛮僧は、うす笑をしながら、語をついで、「腹中に酒虫がある。それを除かないと、この病は癒りません。貧道は、あなたの病を癒しに来たのです。」

「癒りますか。」劉は思はず覚束なさうな声を出した。さうして、自分でそれを恥ぢた。

「癒ればこそ、来ましたが。」

すると、今まで、黙つて、問答を聞いてゐた孫先生が、急に語を挟んだ。

「何か、薬でも御用ひか。」

「いや、薬などは用ひるまでもありません。」蛮僧は不愛想に、かう答へた。

孫先生は、元来、道仏の二教を殆、無理由に軽蔑してゐる。だから、道士とか僧侶とかと一しよになつても、口をきいた事は滅多にない。それが、今ふと口を出す氣になつたのは、全く酒虫と云ふ語の興味に動かされたからで、酒の好きな先生は、これを聞くと、自分の腹の中にも、酒虫がゐるはしないかと、聊、不安になつて来たのである。所が、蛮僧の不承不承な答を聞くと、急に、自分が莫迦にされたやうな氣がしたので、先生はちよいと顔をしかめながら、又元の通り、黙々として棋子を下しはじめた。さうして、それと同時に、内心、こんな横柄な坊主に会つたり何ぞする主人の

劉を、莫迦げてゐると思ひ出した。

劉の方では、勿論そんな事には頓着しない。

「では、針でも使ひますかな。」

「なに、もつと造作のない事です。」

「では呪ですか。」

「いや、呪でもありません。」

かう云ふ会話を繰返した末に、蛮僧は、簡単に、その療法を説明して聞かせた。——それによるに、唯、裸になつて、日向にちつとしてゐさへすればよいと云ふのである。劉には、それが、甚、容易な事のやうに思はれた。その位の事で癒るなら、癒して貰ふのに越した事はない。その上、意識してはゐなかつたが、蛮僧の治療を受けると云ふ点で、好奇心も少しは動いてゐた。

そこでとうとう、劉も、こつちから頭を下げて、「では、どうか一つ、癒して頂きますせう。」と云ふ事になつた。——劉が、裸で、炎天の打麦場にねころんでゐるのには、かう云ふ謂れが、あるのである。

すると蛮僧は、身動きをしてはいけなさと云ふので、劉の体を細引で、ぐるぐる巻にした。それから、僮僕の一人に云ひつけて、酒を入れた素焼の瓶を一つ、劉の枕もとへ持つて来させた。当座の行きがかりで、糟邱の良友たる孫先生が、この不思議な療治に立合ふ事になつたのは云ふまでもない。

酒虫と云ふ物が、どんな物だか、それが腹の中になくなると、どうなるのだから、枕もとにある酒の瓶は、何にするつもりなのだから、それを知つてゐるのは、蛮僧の外に一人もない。かう云ふと、何も知らずに、炎天へ裸で出てゐる劉は、甚、迂濶なやうに思はれるが、普通の人間が、学校の教育などをうけるのも、実は大抵、これと同じやうな事をしてゐるのである。

### 三

暑い。額へ汗がぢりぢりと湧いて来て、それが玉になつたかと思ふと、

つつつと生暖く、眼の方へ流れて来る。生憎、細引でしばられてゐるから、手を出して拭ふ訳には、勿論行かない。そこで、首を動かして、汗の進路を変へやうとすると、その途端に、はげしく眩暈がしさうな気がしたので、残念ながら、この計画も亦、見合せる事にした。その中に、汗は遠慮なく、眶をぬらして、鼻の側から口許をまはりながら、頤の下まで流れて行く。気味が悪い事夥しい。

それまでは、眼を開いて、白く焦された空や、葉をたらしした麻畑を、まじ／＼と眺めてゐたが、汗が無暗に流れるやうになつてからは、それさへ断念しなければならなくなつた。劉は、この時、始めて、汗が眼にはいると、しみるものだと云ふ事を、知つたのである。そこで、屠所の羊の様な顔をして、神妙に眼をつぶりながら、ちつと日に照りつけられてゐると、今度は、顔と云はず体と云はず、上になつてゐる部分の皮膚が、次第に或痛みを感じるやうになつて来た。皮膚の全面に、あらゆる方向へ動かうとする力が働いてゐるが、皮膚自身は、それに対して、毫も弾力を持つてゐない。それでどこもかしこも、ぴり／＼する——とでも説明したら、よからうと思ふ痛みである。これは、汗所の苦しきではない。劉は、少し蛮僧の治療をうけたのが、忌々しくなつて来た。

しかし、これは、後になつて考へて見ると、まだ苦しくない方の部だつたのである。——そのうちに、喉が渴いて来た。劉も、曹孟徳か誰かが、前路に梅林ありと云つて、軍士の渴を醫したと云ふ事は知つてゐる。が、今の場合、いくら、梅子の甘酸を念頭に浮べて見ても、喉の渴く事は、少しも前と変りがない。頤を動かして見たり、舌を嚙んで見たりしたが、口の中は依然として熱を持つてゐる。それも、枕もとの素焼の瓶がなかつたら、まだ幾分でも、我慢がし易かつたのに違ひない。所が、瓶の口からは、芬々たる酒香が、間断なく、劉の鼻を襲つて来る。しかも、気のせいか、その酒香が、一分毎に、益々高くなつて来るやうな心もちさへする。劉は、せめて、瓶だけでも見ようと思つて、眼をあけた。上眼を使つて見ると、瓶の口と、応揚にふくれた胴の半分ばかりが、眼にはいる。眼にはいるの

は、それだけであるが、同時に、劉の想像には、その瓶のうす暗い内部に、黄金のやうな色をした酒のなみくと湛へてゐる容子が、浮んで来た。思はず、ひびの出来た唇を、乾いた舌で舐めまはして見たが、唾の湧く気色は、更れない。汗さへ今では、日に干されて、前のやうには、流れなくなつてしまつた。

すると、はげしい眩暈が、つづいて、二三度起つた。頭痛はさつきから、しつきりなしにしてゐる。劉は、心の中で愈、蛮僧を怨めしく思つた。それから又何故、自分ともあるものが、あんな人間の口車に乗つて、こんな莫迦げた苦しみをするのだらうとも思つた。そのうちに、喉は、益々、渴いて来る。胸は妙にむかついて来る。もう我慢にも、ぢつとしてはゐられない。そこで劉はとうとう思切つて、枕もとの蛮僧に、療治の中止を申込むつもりで、喘ぎながら、口を開いた。――

すると、その途端である。劉は、何とも知れない塊が、少しづつ、胸から喉へ這ひ上つて来るのを感じ出した。それが或は蚯蚓のやうに、蠕動してゐるかと思ふと、或は守宮のやうに、少しづつ、居さつてゐるやうでもある。兎に角或柔い物が、柔いなりに、むづりむづりと、食道を上へせり上つて来るのである。さうしてとうとうしまひに、それが、喉仏の下を、無理にすりぬけたと思ふと、今度はいきなり、鱈か何かのやうにぬるりと暗い所をぬけ出して、勢よく外へとんで出た。

と、その拍子に、例の素焼の瓶の方で、ぼちやりと、何か酒の中へ落ちるやうな音がした。

すると、蛮僧が、急に落ちつけてゐた尻を持ち上げて、劉の体にかつてゐる、細引を解きはじめた。もう、酒虫が出たから、安心しろと云ふのである。

「出ましたかな。」劉は、呻くやうにかう云つて、ふらふらする頭を起しながら、物珍しさの余り、喉の渴いたのも忘れて、裸のまま、瓶の側へ這ひよつた。それと見ると、孫先生も、白羽扇で目をよけながら、急いで、二人の方へやつて来る。さて、三人揃つて瓶の中を覗きこむと、肉の色が

朱泥に似た、小さな山椒魚のやうなものが、酒の中を泳いでゐる。長さは、三寸ばかりであらう。口もあれば、眼もある。どうやら、泳ぎながら、酒を飲んでゐるらしい。劉はこれを見ると、急に胸が悪くなつた。……

#### 四

蛮僧の療治の効は、觀面に現れた。劉大成は、その日から、ぱつたり酒が飲めなくなつたのである。今は、匂を嗅ぐのも、嫌だと云ふ。所が、不思議な事に、劉の健康が、それから、少しづつ、衰へて来た。今年で、酒虫を吐いてから、三年になるが、往年の丸丸と肥つてゐた佛は、何処にもない。色光沢の悪い皮膚が、脂じみたまま、険しい顔の骨を包んで、霜に侵された双鬢が、纒に、顛顛の上に、残つてゐるばかり、一年の中に、何度、床につくか、わからない位ださうである。

しかし、それ以来、衰へたのは、劉の健康ばかりではない。劉の家産も亦とんとん拍子に傾いて、今では、三百畝を以て数へた負郭の田も、多くは人の手に渡つた。劉自身も、余儀なく、馴れない手に鋤を執つて、佗しいその日その日を送つてゐるのである。

酒虫を吐いて以来、何故、劉の健康が衰へたか。何故、家産が傾いたか――酒虫を吐いたと云ふ事と、劉のその後の零落とを、因果の關係に並べて見る以上、これは、誰にでも起りやすい疑問である。現にこの疑問は、長山に住んでゐる、あらゆる職業の人人によつて繰返され、且、それらの人人の口から、あらゆる種類の答を与へられた。今、ここに挙げる三つの答も、実はその中から、最、代表的なものを選んだのに過ぎない。

第一の答。酒虫は、劉の福であつて、劉の病ではない。偶々、暗愚の蛮僧に遇つた為に、好んで、この天与の福を失ふやうな事になつたのである。

第二の答。酒虫は、劉の病であつて、劉の福ではない。何故と云へば、一飲一蕩を尽すなどと云ふ事は、到底、常人の考へられない所だからである。そこで、もし酒虫を除かなかつたなら、劉は必久しからずして、死んだのに相違ない。して見ると、貧病、送に至るのも、寧、劉にとつては、

幸福と云ふべきである。

第三の答。酒虫は、劉の病でもなければ、劉の福でもない。劉は、昔から酒ばかり飲んでゐた。劉の一生から酒を除けば、後には、何も残らない。して見ると、劉は即酒虫、酒虫は即劉である。だから、劉が酒虫を去つたのは自ら己を殺したのも同然である。つまり、酒が飲めなくなつた日から、劉は劉にして、劉ではない。劉自身が既になくなつてゐたとしたら、昔日の劉の健康なり家産なりが、失はれたのも、至極、当然な話であらう。

これらの答の中で、どれが、最よく、当を得てゐるか、それは自分にもわからない。自分は、唯、支那の小説家の Didacticism に倣つて、かう云ふ道徳的な判断を、この話の最後に、列挙して見たまで、ある。

——五年四月——

『芥川龍之介全集 第一卷』一九九五年、岩波書店